

2021 年度 森泰吉郎記念研究振興基金成果報告書
デザイン学における実践研究特有の研究意義の明確化
慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 修士課程 2 年
西村 歩

1. 研究概要

デザイン学では、「理論と実践」が互いに影響し合うことが期待され、実環境におけるデザイン活動から知識を抽出する「実践研究」の重要性を主張する論文も多く見られている。しかしながらデザインの実践研究より得られる研究結果は、一般性に疑義が残るとして査読時に低い評価が下される例も多く、実践研究を主に取り入れている研究者は論文が採択されにくい状況が生まれている。これでは「デザイン行為」に関する学問であるはずのデザイン学において、デザインの実践を経なければ得難い知見が論文で報告されず、実践と研究の乖離が起きかねない。そこでデザイン学において「実践研究」が学問として価値のあるものとして、持続的にその価値を守られるには、従来の研究で主流であった実証性を重視するパラダイムに匹敵する、実践研究ならではの研究意義を確認し、審査過程で適用することが必要であると考えた。そこで本研究ではデザイン実践研究者とデザイン関連学会の論文誌編集委員・査読経験者へのインタビュー結果を統合することで、デザイン実践研究者がデザイン実践研究を通して供給する知と、デザイン関連学会が学術論文に要求する知のありかたのミスマッチを考察し、更に実践研究の価値を適切に評価する為の新たな論文審査基準を提示した。その上で国内のデザイン学の史的調査を実施し、実践研究が評価されにくいデザイン学の既成パラダイムがいかなる要因で成立しているか、また「実践研究」特有の研究価値を推進する対抗パラダイムがどのように展開されていくか論じた。

2. 助成期間中の研究発表

助成期間中は对外発表にも力を入れた。特に論文誌は査読付き主著論文が 2 本、紀要論文が 1 本、また本学総合政策学部上山信一教授との共著論文が 1 本であり、共著論文は KEIO SFC JOURNAL 21 巻 1 号「古くて新しい総合政策学」特集号に掲載された¹。また 7 度の学会発表はいずれも「デザイン」に深く関連する発表が多く見られる学会で実施した点から、論文審査に関係する研究者と研究方法論や評価方法に関する対話を行う「フィールドワーク」の機会として位置づけた。

¹ 当該共著論文は慶應 SFC をはじめとする「総合政策学」の 30 年を俯瞰する論文である。「実践知」の形成を設立当初から掲げている SFC の 30 年を振り返り、分析することは、筆者の修士研究にあたる「デザイン実践研究」の研究価値を考察することへも深い結びつきがある。字幅の関係上、当該論文に掲載されなかった調査結果に関しても個人ブログで公開しているため、以下を是非とも参照されたい。
西村歩：「総合政策学」の 30 年を書きました。、(2022 年 2 月 25 日閲覧、<https://note.com/nishimuraaayumu/n/nbba1d783f047>)

2.1 論文誌への掲載

西村歩：「臨床の知」を学問としてどのように評価するか―序説，日本科学哲学会新進研究者 Research Note, 4号, 2021.

西村歩，新井田統：人間中心設計を“取り入れている”の解釈に関する考察 ―系統的レビューの確立に向けて―，人間中心設計, 17巻, 1号, 2021.

西村歩，小泉尚子：高校生を対象とする「法学論文」執筆演習を通した高大連携の実践研究―中央大学杉並高等学校「法学論文ゼミ」の事例を通して―，中央大学杉並高等学校紀要, 第31号, 2022.

上山信一，西村歩：総合政策学 30年の回顧と展望―理念，研究，改革実践の創発的発展，KEIO SFC JOURNAL, 21巻, 1号, 2021.

2.2 学会発表

西村歩，新井田統：学術は「知覚的知識」とどのように付き合っていくべきか―「幻覚」から始まる議論の行方―，人工知能学会全国大会論文, JSAI2021, 2H1-GS-3a-05, 2021.

西村歩，新井田統：「デザインされた政策」は行政の意思決定に受け入れられるのか―「政策デザイン研究」が今後捉えるべき政策学的視座―，日本感性工学会大会, 2021.

西村歩，塚常健太，新井田統：ヒューマン・コミュニケーション研究における社会的有用性評価 ～ 新規技術の社会的有用性を評価する研究報告ガイドライン～，電子情報通信学会技術研究報告, 121(179), pp.72-77, 2021.

西村歩，吉田勇也：アートプロジェクトを企画・運営する実践的方法論―ART for Wellbeing, ART for Creativity, ART for Marketing―，ヒューマンインタフェース学会研究報告集, Vol.23, No.6, 2021.

西村歩，富田誠，新井田統：Victor Margolin のデザイン研究思想 ―晩年の泰斗はデザインの「学」に何を思う―，共創学会第5回年次大会, 2021.

西村歩，新井田統：「ポスト人間中心デザイン」の理論的整理 ― “ポスト”の波に人間中心デザインは駆逐されるのか―，冬季HCD研究発表会, 2021.

西村歩，塚常健太，新井田統：一般ヒューマンコミュニケーション学 ～研究・理論構築・社会実践の方法論的考察～，電子情報通信学会 HCG シンポジウム 2021, 2021.

2.3 受賞

特にヒューマンコンピュータインタラクション分野でのデザイン研究が見られる電子情報通信学会メディアエクスペリエンス・バーチャル環境基礎研究会では、『ヒューマン・コミュニケーション研究における社会的有用性評価 ～ 新規技術の社会的有用性を評価する研究報告ガイドライン ～』という題の発表を行い，MVE 賞(各回の研究会で発表された発表論文からベストペーパーを選出する賞)を受賞した。本発表はヒューマン・コミュニケーション

ョンに関連するデザイン実践の研究化方法論を提案する研究として位置づけられる。なお以下は MVE 賞の選出コメントである²。

講演番号：MVE2021-24

題目：ヒューマン・コミュニケーション研究における社会的有用性評価 ～ 新規技術の社会的有用性を評価する研究報告ガイドライン ～ (9月研究会)

著者：西村 歩 (慶大)・塚常 健太 (都立大)・新井田 統 (KDDI 総合研究所)

本研究は、ヒューマンコミュニケーション研究において疎かにされがちな、新技術の社会的有用性を評価する方法を提案しています。これは、非営利組織運営の分野で幅広く用いられている「社会的インパクト評価」を参考に、事業の設計図である「ロジックモデル」を制作し、インプットから長期のアウトカムまでの各項目について測定指標を決定しインパクト評価を行うものです。具体例を交えて評価の方法論を明快に示しており、多くの研究者にとって有益な研究であると考えられます。本研究は、工学に偏りがちなヒューマンコミュニケーション研究に社会科学の観点を導入する上で道標となりえるインパクトの大きな研究であると考えられ、今後の発展が大いに期待されることから、MVE 賞に推薦いたします。

3. 今後の研究について

デザイン学において一般化可能なデザインの「理論」の形成が重視されてきた一方、デザイナーが「オリジナリティ」を獲得していくまでの内的過程については、個々のデザイナーによって属人性が高いために十分に議論されてこなかった。そこで修士研究後はデザイナーを対象としたインタビュー調査を開始し、またデザイナー自身が自らの実践を語った文献の調査にも取り組み、デザイナーの作者性や独創性を解明する研究に着手している。これらの研究は修士研究の後発的研究として位置づけられ、近日中に調査結果をとりまとめた学会発表、ならびに論文誌投稿を進めていく予定である。

4. 謝辞

森泰吉郎記念研究振興基金は本修士研究における主要文献の購入、並びに科学哲学会のジャーナル投稿に必要な学会費、修士研究の後発的研究の準備等に使用いたしました。「研究者育成費」という名の通り、修士二年間の研究者としての成長に本基金は欠かせませんでした。二年間のご支援に感謝いたします。

以上

² この MVE 賞選出コメントは、電子情報通信学会メディアエクスペリエンス・バーチャル環境基礎研究会のホームページで公開されている。

電子情報通信学会メディアエクスペリエンス・バーチャル環境基礎研究会：MVE 賞 2022 年度受賞者、(2022 年 2 月 25 日閲覧、<https://www.ieice.org/~mve/award.html>)